様式(8)

論　文　内　容　要　旨

題目　Relationship between social and cognitive functions in people with schizophrenia

（統合失調症患者の社会機能と認知機能の関連）

著者　Takeo Tominaga, Masahito Tomotake, Tomoya Takeda, Yoshinori Ueoka, Tsunehiko Tanaka, Shin-ya Watanabe, Naomi Kameoka, Masahito Nakataki, Shusuke Numata, Yumiko izaki, Satsuki Sumitani, Hiroko Kubo, Yasuhiro Kaneda, Tetsuro Ohmori
平成 30 年 8 月 30 日発行
Neuropsychiatric Disease and Treatment　第 14 巻
2215 ページから 2224 ページに発表済

内容要旨

社会機能の障害は統合失調症患者にしばしば認められるため，その関連因子を見つけることは同疾患の研究及び臨床的介入において重要である。先行研究では精神症状（陽性症状，陰性症状，抑うつ症状），薬原性錐体外路症状などの臨床要因が関与するとされている。さらに最近、認知機能障害が注目され，精神症状よりも強い関連因子であることが示されている。認知機能に関しては従来研究されてきた神経認知に加え,社会認知も注目されている。本研究では，神経認知に加え社会認知も含む認知機能評価バッテリーである MATRICS Consensus Cognitive Battery (MCCB) を用いて認知機能障害を測定し，統合失調症患者の社会機能との関連を他の臨床要因も含めて検討した。

徳島大学病院精神科神経科外来に通院中の Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders-IV の診断基準を満たす統合失調症患者 55 名を対象に，以下の評価尺度を用いて調査した。対象患者より本研究への参加について文書にて同意を得た上で調査を行った。社会機能，認知機能，陽性症状・陰性症状,抑うつ症状,薬原性錐体外路症状については,それぞれ Quality of Life Scale (QLS), MCCB, Positive and Negative Syndrome Scale (PANSS), Calgary Depression Scale for Schizophrenia (CDSS), Drug-induced Extrapyramidal Symptoms Scale (DIEPSS)を用いて評価した。罹病期間，入院回数，抗精神病薬服用量も調査した。本研究は徳島大学倫理委員会の承認を得て行った。

MCCB については Cognitive domain score（各認知領域ごとのスコア）も

Composite score（総合得点）も QLS スコアとの間で有意な相関は認められなかった。しかし，MCCB を構成する 10 個の下位検査のうち，Trail Making Test Part A スコア 及び Brief Assessment of Cognition in Schizophrenia-Symbol Coding (BACS-SC)スコア はQLS総スコア及び一部の下位検査スコアとの間で有意な正の相関が認められた。臨床要因については，PANSS 陰性症状スコアは QLS 総スコア及びすべての下位検査スコアと，PANSS 陽性症状スコアと DIEPSS スコアは QLS 総スコア及び一部の下位検査スコアとの間で有意な負の相関が認められた。CDSS スコアは QLS の一部の下位検査スコアとの間で有意な負の相関が認められた。罹病期間，入院回数，抗精神病薬服用量は QLS スコアとの間で有意な相関は認められなかった。QLS 総スコア及びすべての下位検査スコアを従属変数，QLS スコアと有意な相関のあった上記要因を独立変数として重回帰分析を行ったところ，PANSS 陰性症状スコアは QLS 総スコア及びすべての下位検査スコアに独立して影響を与えていた。CDSS スコア、BACS-SC スコアは QLS の一部の下位検査スコアのみに独立して影響を与えていた。

本研究では，統合失調症患者の社会機能に関連する諸要因について認知機能障害を中心に検討した。その結果，社会認知については社会機能との関連を認めなかった。神経認知については BACS-SC で評価される処理速度が一部の社会機能に影響を与えているが，陰性症状の方が社会機能全般に与える影響力が大きいことが示された。統合失調症患者の社会機能の向上という観点からは，陰性症状に対する治療が重要であることが示唆された。

様式(11)

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

報告番号	乙医第1759号	氏　名	富永　武男
審査委員	主査　有澤　孝吉 副査　勢井　宏義 副査　西村　明儒		

題目　Relationship between social and cognitive functions in people with schizophrenia

(統合失調症患者の社会機能と認知機能の関連)

著者　Takeo Tominaga, Masahito Tomotake, Tomoya Takeda, Yoshinori Ueoka, Tsunehiko Tanaka, Shin-ya Watanabe, Naomi Kameoka, Masahito Nakataki, Shusuke Numata, Yumiko Izaki, Satsuki Sumitani, Hiroko Kubo, Yasuhiro Kaneda, Tetsuro Ohmori

平成30年8月30日発行
Neuropsychiatric Disease and Treatment　第14巻
2215ページから2224ページに発表済
(指導教授　大森哲郎)

要旨　統合失調症の治療目標として、精神症状だけではなく，社会機能が近年特に重要視されてきている。社会機能に関連する要因について研究が積み重ねられ、特に認知機能障害が注目されるようになっている。申請者らは統合失調症患者の認知機能を、Measurement and Treatment Research to Improve Cognition in Schizophrenia (MATRICS) によって新たに開発された包括的認知機能評価バッテリーであるMATRICS Consensus Cognitive Battery (MCCB)を用いて測定し、それが社会機能に与える影響について検討した。同時に、精神症状、薬原性錐体外路症状、罹病期間、入

院回数、抗精神病薬服用量などの臨床要因が社会機能に与える影響も検討した。

対象は、徳島大学病院精神科神経科外来に通院中の Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders-Ⅳの診断基準を満たす統合失調症患者 55 名である。社会機能、認知機能、陽性症状・陰性症状、抑うつ症状および薬原性錐体外路症状の評価は、それぞれ Quality of Life Scale (QLS)、MCCB、Positive and Negative Syndrome Scale (PANSS)、Calgary Depression Scale for Schizophrenia (CDSS) および Drug-Induced Extrapyramidal Symptoms Scale (DIEPSS) を用いて行った。その結果、QLS スコアは MCCB の総合得点及び各認知領域の得点とは有意な相関を認めなかったものの、MCCB の処理速度領域の 2 つの下位検査 (Trail Making Test Part A、Brief Assessment of Cognition in Schizophrenia-Symbol Coding〈BACS-SC〉) と有意な相関を認めた。また、QLS スコアは PANSS の陽性症状と陰性症状スコア、CDSS スコアおよび DIEPSS スコアと有意な相関を認めた。一方、罹病期間、入院回数、抗精神病薬服用量は QLS スコアとの間で有意な相関は認められなかった。重回帰分析を用いて解析した結果、MCCB の下位検査である BACS-SC は、陰性症状より程度は小さいが、独立して QLS スコアに影響を与えていた。

以上の結果は、認知機能障害の一部が他の要因とともに統合失調症患者の社会機能に影響を与えていることを示しており、社会機能改善のための治療的介入における新たな注目点を示した点で有意義であり、学位授与に値すると判定した。